



TITLE:

内村鑑三の神学批判と第一コリント書解釈

AUTHOR(S):

岩野, 祐介

CITATION:

岩野, 祐介. 内村鑑三の神学批判と第一コリント書解釈. アジア・キリスト教・多元性 2011, 9: 1-15

ISSUE DATE:

2011-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/139310>

RIGHT:

内村鑑三の神学批判と第一コリント書解釈

岩 野 祐 介

序 内村鑑三の神学批判について

本稿では、内村鑑三のキリスト教思想において、「神学」ということがいかなる意味をもっているか、という問題を明らかにするために、内村の聖書解釈を通して彼の「神学」観への検討・分析を加えていきたい。特に本稿では、知恵、ということの聖書における扱いと、内村によるその解釈に着目してみたい。

内村鑑三は周知のごとく、無教会主義キリスト教の創始者である。無教会主義とは端的に言えば、キリスト者であることがそのまま教会員であることとイコールである必要はない、という立場である。そしてこのような無教会主義に立つ内村は、神学に対しても同様な立場をとっており、ある種の神学については批判しその必要性を否定している。

この内村による神学批判の論点を、筆者は大枠として次のように分類している。すなわち、神学と信仰とを対比させた論じ方による神学批判と、それ以外の論じ方によるものと、である。¹

内村が無教会主義のキリスト教理解について述べる場合、教派教会のキリスト教理解と対比し、それらを批判することにより、彼のキリスト教理解の特徴を明らかにするという論じ方をすることが多い。² それと同様に、神学と信仰という対比による神学批判は、内村の信仰理解、捉え方を表現するためのものである。つまり、体験的に理解しようとするれば誰にでも単純に理解し、また感じることはできるはずの生きた福音の真理を、ことさら複雑で難解で固定的なものにしてしまおうとするものが、内村の批判する神学なのである。複雑さ・難解さは、専門化・特殊化に繋がる。その結果、神学者はある種の権威となり、場合によっては他の人間の信仰のあり方を裁くような存在となる。ところがそれは、個人の問題すなわち自分の問題として信仰を捉えねばならないと考える内村にとって、受け入れられないことなのである。このことは、内村による神学や神学者に対する批判と、福音書における学者やパリサイ人の描かれ方とが対応していることから明らかであると

1 この内村の神学批判とそれに対する分析については、拙論「内村鑑三の神学批判をめぐって」『神学研究 第五八号』（関西学院大学神学研究会、2011）において詳しく論じている。

2 内村における無教会論と教会論については、拙論「内村鑑三における信仰共同体の問題」『アジア・キリスト教・多元性 第7号』（現代キリスト教思想研究会、2009）40-46 ページで詳しく論じている。

ように思われる。³

一方、信仰と神学の対比以外の論点として目立つものとしては、次のようなものがある。一つは神学を欧米由来のものと捉え、その欧米の歴史文化的背景が、日本という文脈には合わないという論点である。もう一つは、近代的な神学特に自由主義神学のもつ人間中心性への批判である。内村の信仰体験上きわめて重要な問題であった罪と自己中心性に関わる問題、信仰は個人のものであるというキリスト教理解は、内村にとっては譲れないものであったのである。

神学の一部としての神学批判

一方で、八木誠一が述べるように神学とは「キリスト教の知的自己批判」である⁴とすれば、キリスト教信仰の理解・説明という同じ土俵の上で、ある神学的な立場を批判することもまたある種の神学的な営みであるといえることができるだろう。宗教改革以降、教派教会とその神学とは不可分な関係にあり、教派教会の正当性を主張するのが教派の神学であった。他教派を批判・否定するような論争的な応答を通して、神学が発達してきたことも事実である。内村の立場は教派教会の自己中心性、独善性を批判するものであるから、教派の神学に対しては当然否定的なものではあるが、自らの信仰理解に基いた神学批判であるという点でやはり（論争的な）神学の一部を占めているといえるのではないだろうか。

内村のキリスト教理解については、伝統的で特に新しいところはないということがしばしば言われる。⁵ その理由は、一つには彼が前述のように近代の神学、特にその人間中心的・知性偏重的なあり方に反対する立場から、伝統的なキリスト教理解を維持しようとしたからである。ということは内村自身も伝統的な神学、キリスト教理解について、よく学び身に着け、自らのものとしているとも言えるであろう。そもそも彼の活動の基盤となった雑誌のタイトルが、『聖書之研究』であることも、内村自身の学問性、神学的な面を表していると言えるのではないだろうか。すなわち内村は、自らも学問的に信仰の内容を検討し、説明するということをしていながら、それを神学とは言わない、ということなの

3 詳しくは前述の拙論「内村鑑三の神学批判をめぐって」を参照してほしい。

4 八木誠一は、「神学（聖書学、教会史学を含めて）は、哲学が知の自己批判であるのと同様、常に本質の純化と明確化へと向かうキリスト教の知的自己批判であり、本質は絶えざる創造的自己超克であるはずのものだ」（八木、「内村鑑三における直接性」、『内村鑑三研究 第三十九号』、キリスト教図書出版社、2006）と述べる。

5 例えば熊野義孝によれば、内村のキリスト教思想は、「穏健かつ常識的」（熊野義孝「内村鑑三の『信仰・評論・思想』」『熊野義孝全集』新教出版社、1982、297 ページ）であり、また土肥昭夫によれば「ことさらに独創的なものはない」（土肥昭夫『日本プロテスタント・キリスト教史』新教出版社、1980、187 ページ）とされる。

である。

その内村が神学や学問を批判する際に典拠となるのは、聖書である。教派的伝統を持たない内村が拠り所とできるのは聖書だけである。そして内村の神学批判には、教派性への反発という以前の、聖書自体がもつ学問や知恵に対する立場の影響があるようにも思われる。前述のごとく、筆者は本稿に先立って、内村が福音書における律法学者をどう解釈しているか、ということを通して、内村の神学や神学者に対する態度を分析することを試みた。そこから明らかになったことは、内村がイエス自身とイエスの教え自体とのうちに、信仰を固定的な、難解な、権威的なものとしての神学とすることに対する批判を見出していることであった。この、学問や知性に対する批判的スタンスはイエスに限られたものではないように思われる。例えばパウロにもまたそのようなところがあるのではないだろうか。事実内村は、パウロについて次のように述べているのである。

パウロは確かに基督教神学の元祖である、…然しながら茲^(ここ)にパウロの神学に就て一事我等が忘れてはならない事がある、即ちパウロの神学たる神学のための神学ではなかつたこと、是れである、然り、パウロの神学たる新たに神学を建てるための神学ではなくして、旧き死せる無用なる神学を壊つための神学である、パウロの神学は明かに反神学的である、…⁶

内村と第一コリント書 1:18-2:4

そこで以下、本稿では内村鑑三による神学批判に関して、彼の聖書解釈がいかなる影響を与えているか、という問題を明らかにするため、第一コリント書におけるパウロの「知恵」批判を内村がいかに解釈しているか、分析・考察することを試みる。ここで特に注目するのは第一コリント書 1:17 から 2:5 にかけての、「知恵」や「学者」をパウロが批判した部分に関する内村の解釈である。この個所に注目するのは、パウロがはっきり「学者」という用語を用いている代表的な箇所だからである。なお 6 節以降は神の知恵へと主題が移るため、本稿では 5 節まででひとまず区切ることとした。

本稿の準備にあたって筆者は、教文館版内村鑑三著作全集の索引⁷を用いて、日記・書簡を除く内村鑑三の著作より、第一コリント書の上記の該当箇所の引用、あるいは言及を

6 内村「パウロ微りせば」、1906、『内村鑑三全集 14』（『内村鑑三全集』1980-84、岩波書店刊。以下、『全集』と表記する。なお、引用文に付されたルビのうち、通常のルビは「聖書之研究」等の原典から付されているものであり、〔〕に入ったルビは全集編集者により付されたものである）、266-7 ページ。また同じような「神学を壊すための神学」という考え方は「神学の要」（1907、『全集 15』）69 ページにも見られる。

7 『内村鑑三信仰著作全集 25』（1966、教文館）収録。

網羅的に確認し検討を加えた。その結果全部で 51 箇所引用や言及が見られることが確認された。

以下では具体的に内村による言及例を見ていきたい。51 箇所の内訳は以下のようなのである。

まず、箇所による分類である。⁸

1:18-20 1 箇所 / 1:20 1 箇所 / 1:20,21 1 箇所 / 1:21 2 箇所 / 1:22 1 箇所 / 1:22-24 1 箇所

1:23 1 箇所 / 1:24 1 箇所 / 1:23,30 1 箇所 / 1:25 1 箇所 / 1:26 4 箇所 / 1:27 6 箇所 / 1:26,27 1 箇所

1:26-29 2 箇所 / 1:30 20 箇所 / 2:1 1 箇所 / 2:1-5 2 箇所 / 2:4 3 箇所

見ての通り、前述のごとく 1:30 に関する言及の多さが目立っている。

一方、これを年代順に整理すると以下のようになる。⁹

1892 1 箇所 / 1895 1 箇所 / 1900 2 箇所 / 1901 1 箇所 / 1902 4 箇所 / 1903 1 箇所 / 1904 1 箇所

1905 1 箇所 / 1908 1 箇所 / 1911 1 箇所 / 1912 1 箇所 / 1913 2 箇所 / 1914 2 箇所 / 1915 2 箇所

1916 1 箇所 / 1917 1 箇所 / 1918 2 箇所 / 1919 2 箇所 / 1920 2 箇所 / 1922 1 箇所 / 1924 1 箇所

1925 1 箇所 / 1927 3 箇所 / 1928 1 箇所 / 1929 1 箇所 / 1930 1 箇所

1902 年に四件の引用があるのが若干目立つとはいえ、ほとんど均等に分布していることが明らかであろう。よって、この個所にまつわる問題が内村にとって終生変わらず重要な問題であったことが窺い知られるのである。

続いて、内村がどのような文脈でこれらの箇所に言及しているか見ていきたい。これらの言及例のうち、コリント前書の解釈が主眼となっているものが 2 箇所¹⁰、他の聖書箇所（例えばロマ書など）の解釈の中でコリント前書に触れたものが 5 箇所¹¹である。残りが、内村が自らのキリスト教理解、信仰理解を展開する必要上コリント前書に触れているもの、ということになる。

これらの言及例の多くは内村が「学者」、「学問」、「知恵」等を批判する文脈にあるものである。ただし、1:30 に関しては若干異なる。この個所は「神によってあなたがたはキリスト・イエスに結ばれ、このキリストは、わたしたちにとって神の知恵となり、義と聖と購いとなられたのです¹²」とある通り、知恵の問題だけでなく、信仰論、贖罪論、救済論と関わるため、その面からの言及も数多いのである。実際 20 箇所のうち、学問批判

8 詳しくは後掲の資料参照。

9 詳しくは後掲の資料参照。

10 いずれも 1902 年の「哥林多前書第一章一第三章」の一部である。

11 1903 年「哥羅西書第 1 章一第 3 章」、1904 年「帖撒羅尼迦前書の研究」、1921 年「羅馬書の研究」、1922 年「東京講演余録 羅馬書第六十講余録」、1928 年「イザヤ書の研究 イザヤの名に就て」の五つの文章にそれぞれ一箇所と数えた。

12 新共同訳。

や（人間の）知恵批判と関わって触れているのは6箇所であり、それ以外は全て「義と聖と購い」に関わる救済論、義認論、信仰論の文脈である。

それでは以下、具体的な言及例について確認していきたい。

1:18-20 に関する言及

18 節から 20 節にかけてパウロは、この世の知恵や学問と十字架の言葉とを対比させ、救済に繋がる神の知恵としての十字架の言葉の重要性を述べ、この世的な知恵を批判している、あるいはその意味を相対化しているように思われる。これらの箇所についての内村の解釈には次のようなものがある。

1902 年「哥林多前書第一章一第三章」で内村は、以下のように述べる。

○神は世の智者の眼より視れば愚人なり、彼に策略なるもの一つもあるなし、…彼は信ずるを知て疑ふを知り給はず、彼は総て実直にして総て有の儘なり、…

○故に神の救済の道なる十字架の教は世の人の眼には愚の極なり、神の独子が十字架に上げられしとよ、而して如斯にして罪人を救ふの道を開かれしとよ、何人か此妄誕無稽を信ずる者あらんや、希臘哲学に斯かる救済法の曾て説かれしことなし、支那道德は曾て斯かる済民の策を講ぜず、十字架は耻辱の極なり、而して人を救ふの唯一の道は此耻辱の教なりと云ふ、是れ智者俗人の聞て以て愚の極となす所なり（第十八節）。¹³

そしてこれに続いて内村は、人の眼から見て救済であると思われるような栄達や富貴は神の眼からは「沈淪」であり、神の救済は霊の救済であるからそのために「肉慾を滅殺」せねばならず、ゆえに「身を十字架に釘け」なければならない、と主張する。よって、この世のあり方に反して、「愚の極」とも思えるような神のため、霊のためのあり方を敢えて選ぶということなのである。¹⁴ 従って、続く 20 節における「知恵」「知者」も、この世のあり方を象徴するものと解釈される。智者は「智謀者」、学者は「博学者」、論者は「弁論者」であってこれらはいずれも「虚栄者」である。彼等は国を救おうとするが、結局は墮落し「国に良心なき」に至ると内村は考える。¹⁵ 本当に人間と世界を救うのは、「福音の愚」即ちこの世のあり方からは愚かとも思える福音なのである。

この 20 節に関して、内村は 1900 年『聖書之研究』を創刊した際にも言及している。こ

13 内村「哥林多前書第一章一第三章」、1902、『全集 10』、359-360 ページ。

14 同前、360-1 ページ。

15 同前、361-2 ページ。

ここで内村は「私は勿論聖書学者ではありません」「私の聖書智識なるものは実に組織無きもの」¹⁶ と言いながら、「私共が成さんとする総ての事業に就いて私共を常に慰むる聖書の辞」¹⁷ としてこの個所を挙げるのである。すなわち、専門家でない内村が聖書の研究という大業へ挑むことに関する妥当性を示すものであり、聖書もそれを励ましている、ということになる。

1:21-25 に関する言及

21 節は、1905 年と 1927 年の二度に渡って言及されている。1905 年の「神の発見法三則」では 21 節及び第一ヨハネ 4:8 に基づき「神は哲学者の認識すべき者ではない、善人の発見すべき者である、我等神を識らんと欲せば哲学書を渉 獵せずして、小なる隠れたる善を為すべきである」¹⁸ と述べる。一方 1927 年の「基督教の了解に就て」では、「神の教である基督教は了解つて了解る者でない、信じて了解る者である。了解らないから信ずるのである 了解れば信ずるの必要はない。」「宗教は元是れ信すべき者であつて了解るべき者でない。」¹⁹ と、知的に理解しようとする態度ではキリスト教を理解することはできないと主張する。この点においては、1905 年と変わらぬ態度であると言えるだろう。ただし内村はこの文章ではさらに踏み込んで次のようにも述べるのである。

…基督教は信ぜずしては到底了解らない。我を折り、我罪を言表はし我が無知無能不善を認めて神の前に謙下りて始めて基督教の何たる乎が了解る。基督教は傲然として之を我有となす事は出来ない。嬰兒の如き者となりて神の前に平伏して、彼に教へられて、其奥義に達することができる。其事を明かに示す者がコリント前書一章廿一節の言である、…人間の智慧や学問を以て了解るやうな、そんな浅い宗教を了解らんとせざるを可とする。²⁰

知的なだけでキリスト教を理解することはできない、という主張は、信仰を知的領域に閉じ込めてしまうことへの反発をあらわすものであり、その背景には、信仰には自らの全存在を捧げる必要があるという信仰理解があると考えられる。人間は全面的に神に頼るほかないのである。よって内村は知的な理解のうちに、人間の自己中心性や傲慢さを見ることになる。

16 内村「本誌の発行に就て」1900、『全集 8』472 ページ。

17 同前。

18 内村「神の発見法三則」1905、『全集 13』159-160 ページ。

19 内村「基督教の了解に就て」1927、『全集 30』317 ページ。

20 同前。なお引用部中の●による傍点部には、原文では○による傍点が付されている。

22 節から 24 節にかけての言及はそれぞれ一件ずつである。1918 年「ノアの洪水」では一人神を信じて箱舟を作り洪水に備えるノアの「愚かな」姿を、1:22 を用いて説明する。信じないものには愚かな行為であるが、信じる者にはまさに命を与えるのである。²¹ 23 節については 1917 年の「最善か最悪か」で言及している。ここではニーチェの立場などと対比させながら、信じる者にとって最善である信仰が、信じない者にとっては最悪のものとなる、と語る。では信じるか信じないかは人間の意志によるものなのかといえ、内村はそれについては「神に由らずしては基督教は解らない」²² と述べるのである。すなわち、信仰をもたせるのもまた神のはたらきであるということになる。また 24 節については、コロサイ書について解釈した 1903 年の「哥羅西書第一章一第三章」の中で、コロサイ 2:3 の解釈に関わって触れている。キリストは神の大能、神の知恵であるから、「我儕賢からんと欲せば深くキリストを知るべきなり、我儕^{さと}慧からんと欲せば深くキリストを究めざるべからず」「智慧は世事に通ずるにあらず、キリストを信じるにあり」²³ とする。これらの 22-24 節に関わる主張はいずれも信仰とは人知を超える神のはたらきである、との理解に基づくものであると言えるであろう。25 節についても、同様な主張が見られる。1916 年の「神の忿怒と贖罪」の中で内村は、神は単なる愛の神、愛のみの神ではなく義の神でもあるから、罪人をただ許すのではなく十字架上のイエスによる贖罪という「ユダヤ人には礙^{つまづ}く者ギリシヤ人には愚かなる者」であるところの「神の大能、神の智慧」により、「公義と憐愍とを接吻せしめ、罪人を義として尚ほ御自身義たり給ふ」²⁴ のだという。救済というはたらきの偉大さは人間の知恵や価値観では測れない、ということになるのではないだろうか。

1:26-29 に関する言及

26 節に関しては 4 箇所²⁵の言及が見られる。1908 年の「脆き証拠論」では、高い文化や名声、数の力などを根拠に基督教の正当性を主張する立場に反対し、「真理の特性は多数に認められずして少数に認めらるゝにあり、世の慧^{さと}き者^{ちから}権ある者に納けられずして、愚かなる者弱き者に納けらるゝに在り」²⁵ と述べ、26 節に触れる。知恵は権力と並び、この世の力を代表するものとされるのである。1918 年の「花の四月」では「基督教は素々^{もともと}平民の信仰である、特に平信徒に由て維持せらるべき信仰である」²⁶ と述べ、26 節を引用

21 内村「ノアの洪水」1918、『全集 24』、238 ページ。

22 内村「最善か最悪か」1917、『全集 23』、257 ページ。

23 内村「哥羅西書第一章一第三章」1903、『全集 11』、103 ページ。

24 内村「神の忿怒と贖罪」1916、『全集 22』、243 ページ。

25 内村「脆き証拠論」1908、『全集 16』、43 ページ。

26 内村「花の四月」1918、『全集 24』、186 ページ。

している。この時期内村は再臨運動の最中にあったが、再臨の主張に対してはその非科学性などに関して批判されることも多かった。そのため内村は、再臨信仰を率直に受け入れ共有できる人々に、26 節の表現を重ねていると考えられる。1927 年「パウロ伝の一部」でも同様に 26 節を引用して、コリントでパウロの教えを受け入れたものの多くが「中流下流」の人々であったことを述べる。²⁷ この 26 節から 27 節にかけては同じような文脈で引用されることが多い。1925 年の「貧者の祝福」ではルカ伝の広場の説教での、「^{さいは}貧者は^{まづしきもの}福ひなり」をうけ、キリスト教は貧者の宗教であるとして言及する。²⁸ 1900 年の「聖書の話」、1924 年の「ガリラヤの道」では、26 節から 29 節までに言及しているもののやはり同じような文脈である。前者では「平々凡々の我等如きものでも若し神の力に^(も)困ります^(よ)ならば大学者よりも、大聖人よりも貴い人となる事が出来るのであります」²⁹ と言い、後者ではイエスの 12 弟子選定の場面と関連付け、「神が事を為し給はんが為には、学問、教養、地位、所有は却て妨害である。真の天才は却て器の劣りたるを以て現はるゝが如くに、神の能は平凡無能の人を以て揚るのである。」³⁰ とする。いずれも、弱いもの、平凡なものこそ神に選ばれ愛されるとの理解にもとづく主張であると言えるだろう。

1:27 のみ単独で言及した例は 6 件ある。もっとも古い例である 1892 年の「理想の伝道師」では次のように述べている。

…余輩の^{こゝ}愛に一言せむと欲する所は世に所謂^{いぢごん}伶俐なる人の宗教事業に不適任なることは是なり、^{ぐしや}パウロ曰く神は愚者を以て智者を耻かしむと ^{ちしや}宗教家は神と人との取次人なれば ^{はづ}自己の智慧を以て此位地に立むとすることは為し得べからざるなり、…^{しうけうか} ^{かみ} ^{とりつぎ} ³¹

上でも見たように、この理解は内村においてその後も変わらない基本的な理解となる。注目すべきは、さらに内村がここから自らの無教会主義キリスト教への裏づけを引き出していることである。たとえば 1895 年の『余は如何にして基督信徒となりし乎』では、若者たちが独立教会を設立しようとする「無謀」な冒険を後押しする言葉として、この箇所が引用される。³² また 1902 年の「聖書雑感」では、27 節を読んで「余の無智不学に就て

27 内村「パウロ伝の一部」1927、『全集 30』、273 ページ。

28 内村「貧者の祝福」1925、『全集 29』、254 ページ。

29 内村「聖書の話」、1900、『全集 8』315 ページ。

30 内村「ガリラヤの道」1924、『全集 27』419 ページ。

31 内村「理想の伝道師」1892、『全集 1』264 ページ。なお引用部中の●による傍点部には、原文では○による傍点が付されている。

32 内村『余は如何にして基督信徒となりし乎』1895、(鈴木俊郎訳、岩波文庫、1938) 65 ページ。

絶望せざるに至る」³³と内村は告白する。他の 27 節に言及した文章も概ね同じような文脈であるためここでこれ以上引用はしないが、いずれも愚者や弱者、あるいは一般人こそ神に選ばれる、といった理解がその背景にあり、また内村は自らをその愚者、弱者、一般人の側に重ねていることが明らかである。1911 年の「神に選ばれし者 学者多からず貴人多からず」では 26 節から 29 節までを独自に訳しているが、やはり同じような解釈によるものである。神がこの世の知恵あるものや権威のある者ではなく愚かなもの、弱い者、³⁴賤しいものや軽んじられる者を選ぶとするのである。

1:30 に関する言及

1:30 については前述の通り、ここまで見てきたようなこの世の価値観としての知恵を批判する文脈による言及と、内村にとって非常に重要な問題であった贖罪論、義認論、信仰論の問題としてとらえた文脈による言及とがある。ここでは、前者について確認することとする。ただし内村にとって二つの問題は切り離されているものではない。例えば 1919 年の「完全き救」³⁵では、十字架のキリストの救いのうちに「すべての智慧と知識」とがあると述べる。³⁵救済はすべてを包括するものとされるのである。

1913 年「パウロの救拯観」ではここでの知恵という言葉は「ソフィヤ」であるから「哲学」と読むべきであり、キリスト者にもギリシア人のように哲学が必要であるとするならばイエスがそれであるとパウロは言っている、と解釈する。³⁶1914 年の「信仰の単純」³⁷では、「単純ならざれば明瞭ならず、又単純ならざれば熱心なる事能はず」³⁷と述べ、30 節に触れながら、法然や日蓮の鎌倉新仏教が単純化により仏教を一般層まで広めたことを挙げ、キリスト教信仰も単純に言い表す必要があるとする。そしてやはりここでの知恵とは哲学、それも人生哲学・人生観であると言い、「イエスに学び、イエスの心を識り、信仰を以てイエスに同化して、宇宙と人生とを其中心に於て窺ふことが出来る」³⁸と訴える。内村によれば知恵とは知的な活動にとどまらず、信仰を通して生き方へと至るものである。そしてその信仰の中樞は単純なものであり、誰でもそこに到達できると主張する。1919 年「智識の本源」では「キリスト彼自身が我等の智慧」「神はキリス

33 内村「聖書雑感」1902、『全集 10』158 ページ。

34 内村「神に選ばれし者 学者多からず貴人多からず」1911、『全集 18』、64 ページ。

35 内村「完全き救」³⁵1919、『全集 24』、518 ページ。

36 内村「パウロの救拯観」、1913、『全集 20』459 ページ。

37 内村「信仰の単純」1914、『全集 20』261 ページ。

38 同前、264 ページ。

トを立てゝ我等の哲学と為らしめ給うた」³⁹ と言ひ、ゆえに「我等はイエスキリストを知るに依てエホバの神を知るのみならず又同時に宇宙の原理を知り真正なる意味に於ての哲学者となる」⁴⁰ と内村は語るのである。1920 年の「完全なる救拯」^{すくひ}でも知恵を哲学と解釈し、「宇宙の一部にして人類の一人たる「我」を知らずして哲学を語る事は出来ない、真正なる人生哲学の出発点は「我」に在る」⁴¹ と述べる。キリスト者にとってそれがキリストなのである。内村によれば、「我は宇宙の一部にして又其中心である、我自身の義たり聖たり贖たるキリスト、我が人生哲学たるキリストが同時に又宇宙の中心たるが故である」⁴² となる。

2:1-5 に関する言及

2 章に関しても、1 章に関する言及と同様、知的な見方・あり方とは異なる別のあり方としてのキリスト教理解を主張する。1902 年の「実力の宗教」では「其勢力と窮なき生長の理由は其言葉にあるのでなくして、其能力にあるのであります、神は議論ではなくして実力であります、人生は理屈ではなくして実行であります」⁴³ と述べる。1904 年の「帖撒羅尼迦前書の研究」では、第一テサロニケ 2:5 と関連付けて第一コリント 2:4 を引用し、パウロが率直で赤裸々な言葉を用いたことをあらわす、と解釈する。⁴⁴ 新共同訳での「知恵にあふれた言葉」、文語訳での「智慧の美しき言」^{うるは}は、第一テサロニケでの「へつらう」言葉と結び付けられているわけである。1912 年「宗教と農業」でも同じような文脈で 2:4 に触れて「理論と美文とは宗教の輔佐ではなくして其妨害であります」⁴⁵ と述べる。

前出の「哥林多前書第一章一第三章」では、2:1 及び 2:4 について次のように解釈している。2:1 については、「福音は事実なり、美文に非ず、哲学に非ず、是は之れ単純なる言辞を以てのみ伝へらるべきもの」⁴⁶。2:2 については、「キリストの僕なるパウロは哲学と美文とを用ゐざりし、彼は単純に、且つ大胆に、且つ謙遜にイエスキリストの福音を宣たり、」^{〔のべ〕}「彼の無骨なる言辞に霊と能との証明ありき」「霊の証明とは神の霊が直に

39 内村「智識の本源」1919、『全集 25』129 ページ。なお引用部中の●による傍点部には、原文では○による傍点が付されている。

40 同前。

41 内村「完全なる救拯」、1920、『全集 25』257 ページ。

42 同前、258 ページ。なお引用部中の●による傍点部には、原文では○による傍点が付されている。

43 内村「実力の宗教」、1902、『全集 10』330 ページ。なお引用部中の「其言葉にあるのでなくして」の部分には、原文では○による傍点が付されている。

44 内村「帖撒羅尼迦前書の研究」、1904、『全集 12』、381 ページ。

45 内村「宗教と農業」、1912、『全集 19』276 ページ。

46 前出「哥林多前書第一章一第三章」、367 ページ。

人の霊に示す所の証明なり、能⁴⁷の証明とは霊の活動の結果として顕はるゝ行動の証明なり」。そして 2:5 に関して、「福音は神の真理」であるから、これを人々に伝える上でパウロに「人の智慧と技術とを用ゐる要」はなかったのだ、と結論付ける⁴⁸のである。内村によればパウロは、パウロ本人の力ではなく神の力により伝道していた。パウロの知恵や能力が優れているからコリントの人々が彼の伝える神を信じたということになれば、それは神を信じたのではなく人を信じたことになってしまう。

以上より、内村の解釈の特徴を改めてまとめておこう。第一に、この世のものとしての知恵や力に対する神の知恵・力という対比を挙げねばならないであろう。そしてそこから、この世を越える神を信じる内村らがこの世に打ち勝つ力をもつことが可能になる、という理解が導かれる。神の知恵は単純で体験的であり、弱い者や愚かな者にも理解・体得可能なものである。それは、限られた特権的な人間だけが宗教的な指導者となる、という考え方を否定することへと繋がり、それゆえに特定の教派の正当性を主張することへの批判ともなる。内村は、それらの弱い、無能な人間の側に自らもあると考えているのである。

このようなパウロの言葉と内村の理解との関連性からして、内村が教派性と関わりをもつ神学を否定する背景には、パウロの思想に含まれるこの世の学問や知恵に対する批判からの影響があるということができるとはならないだろうか。

一方で、これはパウロ自身にも言えることであるが、知恵や言葉を批判しながらも、その伝道方法は言葉、文書を中心とするものである。特に内村の場合、熱狂体験のようなものは否定しており、また瞑想の中で心のうちに神を捉える、といったやり方をとることもない。聖書を読み、研究することが基本である。その意味で知的学問的な営みを全体的に否定しているのではない。人間がその全てで信仰すべきでありながら、知的なあり方が支配的になってしまうことを内村は危惧しているのである。

結びにかえて

無教会主義キリスト教は教派教会に必要性を認めないという点で特異なものである。しかしその成立の基盤が、内村のキャラクターとそのカリスマ性だけになってしまつては、教派教会への批判や、そもそもの無教会主義であることの正当性・妥当性を主張することが難しくなる。そこで、内村は無教会主義が聖書に基づく集まりであり続けなければならないと考え、独断や自己中心に陥らないよう、常に聖書に鑑みるという立場をとることとなったのではないかと思われる。その上で学問的な研究というやり方をとったのは、好き

47 同前、369 ページ。

48 同前。

勝手に読みこんでいるわけではないという客観的な妥当性を保つためでもあるだろう。
とはいえ内村が用いる学問的手段は、当時の最新の（流行の）ものというよりは、伝統的・保守的なものである。彼自身、次のように述べている。

○余輩の聖書研究はデリツチ、ゴードー等〔なら〕に倣（な）ふ者であつて旧式である、新式に改めよと注意して呉（く）れる人がある、注意は良（よ）に有難（ありがた）くある、然し今直（ただ）に採用することはできない。

…教会を嫌ふ余輩のことなれば、教会の嫌ふ所たる所謂高等批評は余輩の歓迎すべき筈〔はず〕の者なれども、而も此一事に対しては余輩は教会と態度を共にする者である、…所謂新式の聖書研究は文法である、哲学である、歴史である、然れども信仰でない、…⁵⁰

客観的聖書研究といえども教派性と結びつく側面がある。学問的手法としての高等批評についても、積極的にうけいれる教派教会とそうでない教派教会とが存在したことは事実である。また神学、聖書学に、専門的な学問として知の囲い込み・独占を為そうとする面があることも否定できない。内村は、聖書が特殊な専門的な知的訓練を受けた者にしかその真意を理解できない書物であるとは考えないのである。聖書は信仰により読むのであって、知識はそれを補うものである。内村は率直かつ知的な読み方を目指したとでも言えるであろうか。

この彼の主張には、近現代アメリカ合衆国のファンダメンタルなキリスト教理解に似た側面がある。⁵¹ すなわち、聖書解釈が特定の知的訓練を受けた人間に独占されることを嫌い、庶民的・平民的な聖書理解、生活感覚に根ざした聖書理解をしようとする面、及び

49 とはいえ内村の文章からは、内村が聖書に導かれ思想を展開する要素と、自らの思いを聖書に読み込んでいる要素との両方があるという印象を受けるのも確かである。鶏が先か卵が先か、といった問題であり論証は困難であるが、恐らくこれ（これら）は相互作用的なものであると考えるのが妥当なのではないだろうか。

50 内村「旧式耶新式耶」、1915、『全集 21』、454-5 ページ。

「デリツチ」は Delitzsch, Franz Julius 1813-1890。ドイツの旧約学者。敬虔主義的傾向もち、救済史的正確の神学を唱え、合理主義的・批判的聖書研究を斥けていたが、後にはその成果の一部を受け入れるようになった。保守的・実地的な立場から包括的な聖書注解を著した。

「ゴードー」は Godet, Frédéric Louis 1812-1900。スイスの聖書学者。全体として保守的傾向が強い。

（以上の記述は『キリスト教人名辞典』（日本基督教団出版局、1986）による）

51 森孝一によれば、20世紀初頭のアメリカのファンダメンタリストたちは、近代思想によって武装した「エリート」が世界を支配し始めており、普通の民衆である自分たちは社会の主流から置き去りにされつつあるという危機感を感じていた、とされる。また森は、そのような意識は、高等教育を受けた解釈者だけが聖書を解釈できるという高等批評の立場に対しても向けられると述べる。（森、『宗教から読むアメリカ』、1996、講談社、191-192 ページ）

近代的な科学を人間中心主義である捉える面等である。にもかかわらず、無教会主義のサークル内にはいわゆる知識階層に属する人々が数多いのは興味深いところである。内村のある種素朴なキリスト教理解はどこまで受け継がれているのであろうか。彼らのキリスト教理解と社会的なあり方とに関連があるのか、あるいは矛盾が生じることはなかったのか、という問題は、改めて考えられなければならないように思われる。また同様に、本当に内村は弱い、無知な者の側にいるのか、という問題についても考え直さねばならないように思われる。無教会主義キリスト教の聖書講義集会は、一定の教養がないとついていけないようなものになっているようにも思われるからである。

もちろん聖書自体の中に、知識や知恵に対する肯定的な面と否定的な面とがあり、学問や学者に対する見方も一通りではないことを考えると、この問題は簡単に決着のつくものではない。歴代の神学者たちが、自分たちのやっていることが旧約の預言者たちが批判する神殿の祭司のようになっていないか、またイエスやパウロの批判するような律法学者のようになっていないか、どのように自己反省する仕組みを保ってきているかということと合わせて、考え続けねばならないように思われる。

箇所による分類表

箇所	年代	収録巻-ページ	表題
1:18-20	1902	10-360	哥林多前書第一章一第三章
1:20	1900	8-472	本誌の発行に就て
1:20,21	1915	21-343	我が信仰の友 源信と法然と親鸞
1:21	1905	13-159	神の発見法三則
1:21	1927	30-317	基督教の了解に就て
1:22	1918	24-238	ノアの洪水
1:22-24	1929	32-103	私の基督教
1:23	1917	23-256	最善か最悪か
1:23,30	1914	21-38	救済の能力
1:24	1903	11-103	哥羅西書第一章一第三章
1:25	1916	22-243	神の忿怒と贖罪
1:26	1908	16-43	脆き証拠論
1:26-30	1911	18-64	神に選ばれし者
1:26	1918	24-186	花の四月
1:26	1927	30-273	パウロ伝の一部
1:26,27	1925	29-254	貧者の祝福
1:26-29	1900	8-315	聖書の話
1:26-29	1924	27-419	ガリラヤの道
1:27	1892	1-264	理想的伝道師
1:27	1895	岩波文庫版 65	余は如何にして基督信徒となりし乎
1:27	1901	9-149	キリスト信徒の勇氣
1:27	1902	10-158	聖書雜感
1:27	1913	20-184	パウロの信仰
1:27	1915	21-200	人の貴尊
1:30	1905	13-384	我が事業と我が正義
1:30	1907	14-481	余の基督教
1:30	1912	19-132	キリストと我れ
1:30	1912	19-306	パウロの救拯観
1:30	1913	20-459	パウロの救拯観
1:30	1914	20-261	信仰の單純
1:30	1916	22-167	静かなる信仰
1:30	1917	23-357	全信の道
1:30	1917	23-237	義なるキリスト
1:30	1919	24-518	完全き救
1:30	1919	25-129	智識の本源
1:30	1919	25-216	拾珠録
1:30	1919	24-517	余の宗教
1:30	1919	25-49	基督者の義
1:30	1920	25-257	完全なる救拯
1:30	1920	25-579	栄化の順序
1:30	1922	27-121	聖潔と聖別と聖化
1:30	1927	30-376	現代思想とキリスト教
1:30	1928	31-15	イザヤ書の研究 イザヤの名に就て
1:30	1930	32-315	コンボルシヨンの実験
2:01	1902	10-331	実力の宗教
2:1-2:5	1920	25-351	文学者の基督教
2:1-2:5	1922	27-574	東京講演余録 羅馬書第六十講余録
2:04	1902	10-367	哥林多前書第一章一第三章
2:04	1904	12-381	帖撒羅尼迦前書の研究
2:04	1912	19-276	宗教と農業
2:07	1921	26-445	羅馬書の研究

年代による分類表

年代	箇所	収録巻-ページ	表題
1892	1:27	1-264	理想的伝道師
1895	1:27	岩波文庫版 65	余は如何にして基督信徒となりし乎
1900	1:26-29	8-315	聖書の話
1900	1:20	8-472	本誌の発行に就て
1901	1:27	9-149	キリスト信徒の勇氣
1902	1:27	10-158	聖書雜感
1902	2:01	10-331	実力の宗教
1902	1:18-20	10-360	哥林多前書第一章—第三章
1902	2:04	10-367	哥林多前書第一章—第三章
1903	1:24	11-103	哥羅西書第一章—第三章
1904	2:04	12-381	帖撒羅尼迦前書の研究
1905	1:21	13-159	神の発見法三則
1905	1:30	13-384	我が事業と我が正義
1907	1:30	14-481	余のキリスト教
1908	1:26	16-43	脆き証拠論
1911	1:26-30	18-64	神に選ばれし者
1912	1:30	19-132	キリストと我れ
1912	2:04	19-276	宗教と農業
1912	1:30	19-306	パウロの救拯観
1913	1:27	20-184	パウロの信仰
1913	1:30	20-459	パウロの救拯観
1914	1:30	20-261	信仰の単純
1914	1:23,30	21-38	救済の能力
1915	1:27	21-200	人の貴尊
1915	1:20,21	21-343	我が信仰の友 源信と法然と親鸞
1916	1:30	22-167	静かなる信仰
1916	1:25	22-243	神の忿怒と贖罪
1917	1:30	23-237	義なるキリスト
1917	1:23	23-256	最善か最悪か
1917	1:30	23-357	全信の道
1918	1:26	24-186	花の四月
1918	1:22	24-238	ノアの洪水
1919	1:30	24-517	余の宗教
1919	1:30	24-518	完全き救
1919	1:30	25-49	基督者の義
1919	1:30	25-129	智識の本源
1919	1:30	25-216	拾珠録
1920	1:30	25-257	完全なる救拯
1920	2:1-2:5	25-351	文学者の基督教
1920	1:30	25-579	栄化の順序
1921	2:07	26-445	羅馬書の研究
1922	1:30	27-121	聖潔と聖別と聖化
1922	2:1-2:5	27-574	東京講演余録 羅馬書第六十講余録
1924	1:26-29	27-419	ガリラヤの道
1925	1:26,27	29-254	貧者の祝福
1927	1:26	30-273	パウロ伝の一部
1927	1:21	30-317	基督教の了解について
1927	1:30	30-376	現代思想とキリスト教
1928	1:30	31-15	イザヤ書の研究 イザヤの名に就て
1929	1:22-24	32-103	私の基督教
1930	1:30	32-315	コンボルシヨンの実験

(いわの・ゆうすけ 関西学院大学神学部助教)